

タコの大好物は、エビやカニなどの甲殻類だ。エビ網漁が解禁される前なので、わずか一メートルしか水深がない浅場でも、ちよつとした岩の陰にはイセエビが群れていた。タコと甲殻類は、どちらも夜の方が行動が活発になる。ほんの三十センチしか幅のないような平べったい岩の陰から、細長い触覚が何本もつきでているのを彼は見つけた。

体を折って、水面から頭をさしこんだ。シユノーケルに水が流れこみ、わずかな水圧が鼓膜を圧迫する。逆立ちするように岩の下をのぞきこむと、四尾の立派なイセエビがひしめきあっているのが見えた。

手をのばしつかまえた欲望をこらえた。ウェットスーツこそ着ていないものの、彼がTシャツにビーチサンダル姿で、船揚げ場から泳ぎだすのを、土地の漁師は見ている。他の魚貝類はともかく、イセエビとアワビは、漁師にとつて重要な収入源だ。その場では見て見ぬふりをするだろうが、密漁者への報復はいつか必ずある。地元の商店で買物できなくなる、止めておいた車に

イタズラされる、くらいならまだいい。一年前、別荘地の外れにたつ一軒家が全焼した。冬場のことで、利用者は誰もおらず、放火であることは明らかだった。犯人はつかまらなかったが、その別荘のオーナーが、ジェットスキーを使った密漁の常習犯であることは、地元では知られていた。ジェットスキーで沖にでて、ウェットスーツにウエイトベルトを巻いて、イセエビやアワビ、サザエなどをあさっていたのだ。噂では都内の料理店に卸していたらしい。あまり筋がよくない男で、一度咎めた漁師をあべこべに脅したことがあった。

そこまで悪質なつもりはないが、地元の間人にとつてみれば、都会から流れてきてひとり暮らししている男など、とうていまっとうではないに決まっている。田舎では悪口は増幅され伝わっていく。お遊びに一尾のイセエビを獲ったつもりが、密漁の常習犯にされたのではかなわない。

あきらめることにして、イセエビは眺めるだけにとどめた。海面に浮上すると、ためておいた息で、シユノーケルの水を吐きだした。ビーチサンダルが脱げないでいどのスピードで、さらに沖へと進んだ。

灰色のかたまりが動いているのに気づいたのは、十メートルほどいったときだった。岩陰からでてきたものの、寝惚けてふらついている、といった風情だ。頭の大きさが握りこぶしよりひと回りほど大きなマダコだった。

彼は水を蹴った。斜めに水中を突進し、頭のすぐ下をつかんだ。タコは素手でつかまえるにはコツがある。ただつかんだだけだと、足を腕にからみつけられ、吸盤で痛い思いをするからだ。

全長が三十センチもないタコであっても、つけ根に近い吸盤だと血がにじむほどの吸着力をもつ。

つかまえたタコを水中でふり回す、それがコツだ。彼にそれを教えたのは、大昔、伊豆で名うての密漁師だった男だ。

——文字通りな、8の字にふり回すんだ。そうすつと、タコは目を回して体がまっすぐになる。そのすきに袋にしまうのさ。

ただしタコは脱走の名人だ。わずか一センチのすきまがあれば、そこから身をくねらせて逃げ出す技をもっている。

タコはふり回され、八本の脚をのぼしたままおとなしくなった。彼は獲物をしまっていた網袋にタコをつつこんだ。そのとき、ビーチサンダルが片方脱げた。

舌打ちをした。右手で網袋の口をつかみ、左手で流れそうになったビーチサンダルをすくった。両手が塞がり、やむなく顔を水面からあげた。

水中マスクごしに、百メートルほど先の船揚げ場に止まった車が見えた。漁師の軽トラックの邪魔にならぬよう、崖のくぼみにぴったりと止めた彼の四WDのまよこに停止している。漁師町ではめつたに見ることのない、黒塗りのセダンだった。

その少し先をUターンしていく、白いヘルメットのバイクが見えた。制服警官がまたがった原付オートバイだ。道案内をさせられたらしい。地元の警官は、彼のことを知っている。たぶん警視庁から千葉県警に申し送りがあり、地元署はさりげない監視を命じられていたのだ。

保守党一色の地元ではめつたに仕事のない公安係ははりきったろう。しかし三年近くもたった今、問題を起こすような彼に、興味を失っているにちがいはなかった。

問題など起こしようがない。

今の彼は、釣り具店の深夜の店番と知り合いの遊漁船の仲乗りが仕事だ。それがなくときは、磯や堤防で釣り糸をたらすか、今日のような暖かい日に、ちよつとした酒のつまみを獲りに潜っている。

海開きまでには、あとひと月ほどある。気温はかなりあがつて二十八度、地上よりひと月季節が遅れる海の水温は、二十二度といったところだ。

ビーチサンダルを足に戻し、泳いでいるうちにタコが脱走しないよう、網袋の口を縛った。密漁師の言葉がよみがえった。

——タコをつかまえられたらよ、イセエビもこっちのもんだ。どんな岩の奥に隠れてる奴だつて、簡単につかまえられる。

やり方はこうだ。玉網を、イセエビが隠れている岩の前に広げておく。エビは当然、奥へ奥へと這いこんでいく。ところが、タコの足を一本切り取り、岩の下にさしこむと——。

天敵の出現に、すわ一大事と、まるで空母をカタパルト発進する戦闘機よろしく、イセエビは飛びだしてくるといふのだ。そしてあつけなく玉網の中へ。

その話を聞いて以来、いつか試してみたいと思っていた。

だがここは手つかずの大自然が残されているという、ど田舎ではない。漁業権が確立され、沖の漁場であっても、漁協によってわりふりが決められた、近代的な土地なのだ。人間が勝手に海に境界線を作ることに対して、自然は気にかけないとしても。

好きにするがいい、ただしこちらも好きにする——それが自然という奴だ。汚しても荒しても文句はいわないが、たとえせつせと保護につとめようと、シケれば平気で人の命をもつていく。海で命を落とすのが、自然を愛する人間であろうがなかるうが、そんなことは知っちゃいない。お前らの理屈とこっちの事情は関係ない、というわけだ。

水深は一メートル五、六〇。足がつかなくはないが、陸地のようすを観察するには、立ち泳ぎをしたほうが安定する。

黒塗りのセダンのナンバプレートまでは読めなかったが、中に人間が三人乗っているのは確認できた。運転席にひとり、後部席に二人。セダンは彼の車を封じこめたまま、動く気配がない。彼が帰ってくるのを、その場で待つつもりのようなのだ。

彼は安物のダイバーズウォッチを見た。時刻は、午後二時半。もうしばらくすると、夕方の網をおろすために、漁師たちがいつせいに港にやってくる。道を塞ぐ黒塗りの車は、この小さな港を職場にする、気の荒い男たちの響響ひびひびの的になるだろう。甲高いクラクションを浴びせる軽トラックに囲まれるにちがいない。

そうなるまで待つてみたい気持もあった。だがTシャツ一枚で一時間以上も素潜りをくり返していたので、体が冷えきっている。煙草も吸いたい。

シュノーケルをくわえ直し、陸に向かってゆっくりと泳ぎ始めた。

船揚げ場に近づくと水温が上がり、心地よかった。五〇センチほどの水深のところ、海底に腰をおろし、マスクを外した。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。